

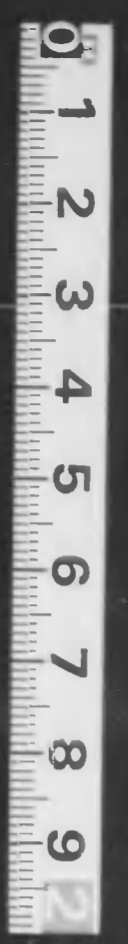
寫眞週報

編輯部報情閣内
ンセ十・號四十八第・日七廿月九

昭和二十一年九月廿七日 第百八十四號



銃後後援特輯





十月三日から九日まで一週間、銃後後援強化週間が行はれる。いふまでもなく、現下の複雑多難な国際情勢の裡に、わが國が一大躍進を遂げ、英亞聖戰の目的を達成するには、一億の民が心を協せ戦線と銃後がほんとうに力強く結ばれてこそ、はじめてそれは可能なのである。

一年前の昭和十三年十月三日は、畏くも軍人擁護に関する勅語を賜はつた日である。われわれはこの聖旨を奉讀し軍人擁護の精神を今度の週間に限ることなく、われわれの日常生活を通して水増しのものとし銃後の道徳として確立しなければならぬ。

大陸に散華した英靈を追悼し、その手をその足を國家に捧げた傷痍の勇士の手となり足となり、又わが國傳統の美徳たる隣保相扶の心操をより組織的な強力なものとし、庶民階級家族の生活支援を官民協力で徹底化することは、とりもなほさず第一線將士の後援の要をなくすることであり、銃をとらず内地に安穩の生活を築きあつて、これに謀せられた尊い義務でもあり、これにはじめて銃後國民も亦前線將士の勞苦の一端を分担することが出来るといへよう。

澄々と清く温泉に浸り、杖に託しては白砂に歩を運ぶ。白衣を脱いでなほ傷痍の身を養ふ人たちに、南海の湖風はあくまでも和やかに爽やかに吹き寄る。——白濱温泉保養所にて

撮影 鈴木實

内閣府 衛生局 監製
 日本製薬株式会社 監製

疲れ易い眼を 勞はまりせう



残暑期の激しい光線があなたの眼を蝕み、職場の多忙が視力の低下と眼疾を植付けます！

疲は効薬いよ快のルイマス
 眼、しや醫にかや爽を目れ
 疾眼てい除を症炎血充の内
 夕朝、すまし防豫し療治を
 課一第の化強力視は眼點の

新眼科薬

ルイマス

店商置玉 社會式株 店理代總

七五十四・ンセ五十二



カブトは軍人傷兵記念章



いづで湯に癒す

傷兵軍人白濱温泉療養所



撮影
鈴木 實

↑ 水治療浴室は
四人四様のボ
クスで……右から
四股浴槽、薬槽、
電気浴槽、泡沫
浴槽

↓ 三方ガラスの
大浴室で温泉に
汗流す治療患者
はメキメキと治癒
してゆく。その
快味に思はず口
づさむ軍歌に職
友を思ひ出す

↑ 柔らかい傾斜面
の仰臥湯槽には
煙々と秋晴れの
陽が差込む。あ
の時はね……と
と、おらが手柄
話も湯のけむり
に湧きあがる

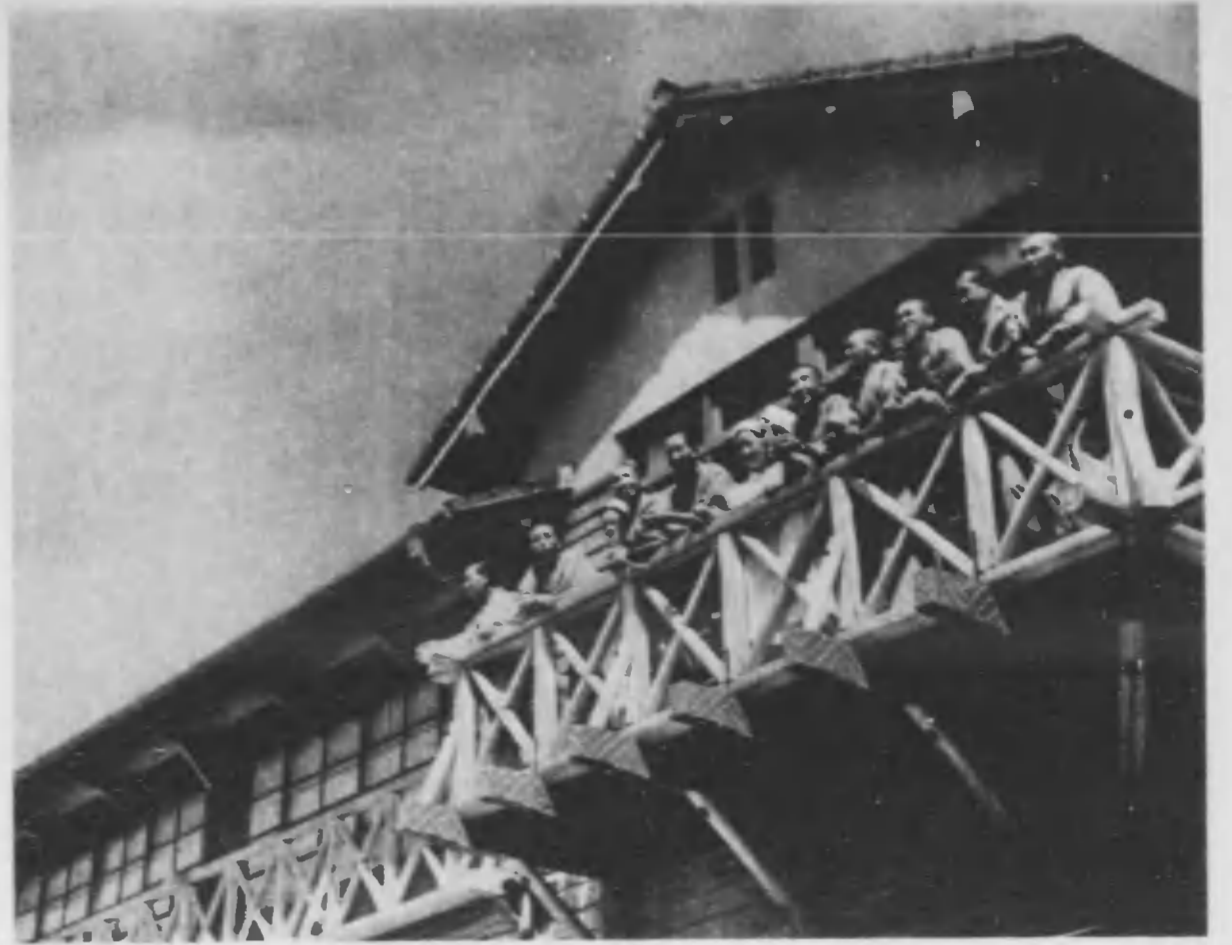
↓ 物療機械室は
全く大人の玩具
部屋である。右
から肩の関節を
ゆるやかにする
肩関節運動機、
足の関節をゆる
やかにする足關
節運動機、屈伸
運動機、居な
がらにして自転
車競走の出来る
全身運動機

白濱の勇士のうちに日ならずして戦傷病がよくなり、退院の上
勇躍戦地に向ふ人もあるが、除役となつて郷里へ歸り統後の一國民
として生活戦線に立つて活動する人も多い。
しかし傷病がよくなつて社會へ出たのちでも季節の變り目になつ
て痛み出したり、或は病後の衰弱がひどくて生活戦線から落伍する
場合がないたらうか。
九月十七日入所を始めた軍事保護院の傷兵軍人白濱温泉療養所は
さうした傷兵軍人が後顧の憂ひなく十分の温泉治療を受け、再び職
業戦線に立ち上るやうにと、設立されたものである。
黒潮灘の南海、紀州田邊灣を一望に収める白濱端山山の療養所は
近代温泉治療の粹を基とした設備と風光に恵まれた理想的なものであ
る。
端山山に或は白砂青松の磯邊に自ら歩はりつゝ歩を運ぶ傷兵軍人
の前には希望の道が遙かに拓けてゐる





◁ すらり療養所のバルコニーに顔を揃へ大口あいて打ち興じてゐる。
美しい紺碧の海、陽の光



◁ 鬼さんこちら、手の鳴る方へ千疊敷岩で附添の看護婦や子供と無心の輪を畫いて遊戯に耽ける療養の人達は痛みも憂ひも南海に捨て流して初秋の隅を一杯に楽しむ

◁ 手の不自由と足の不自由な二人は相より相たすけて白砂青松の海岸を逍遙する。ひやかすつもりか看護婦さんは、「仲のいいこと……」三人の間には朗らかな笑が湧く

◁ 浮き一つに全神経を集めて無我の境に入る釣、釣は楽しい。何が釣れるか米を垂れた大公望と、何を釣上げるかと因座を呑む見物人を潮風が柔く撫でてゆく(下左)

いづ湯に癒す

◁ 歐洲の戦争は何だか生ゆるいやらたな。俺等の攻めた大規模の激戦の壮烈さはどうだ。もう一度どきどきい確煙の香が嗅ぎたいぞ





大	傷	ハ	鐵
阪	疾	ン	腕
職	軍	マ	に
業	人	フ	
補		ー	
導			
所			

傷病も治癒して除役となつた傷病軍人のなかには真傷の種類、程度によつて元の職業にかへれる者と、また新しい職業を覚えなければならぬ者がある。かうした傷病軍人のうちから傷病が比較的軽い者を中心にして、これに頼りながらも比較的長期かつ高度の教育を志す者のために東京、大阪及び福岡に國立の職業補導所が設けられた。大阪府堺市の傷病軍人職業補導所は定

員二百名で洋服、洋裁、家具工、工場管理、製菓、精密機械、旋盤、仕上、フライス、鍛接の十科目の職業再教育を行つてゐる。旋盤を操る不自由な手、ミシンを踏む不自由な足には傷兵として社會の勢はりに甘んずることなく、傷つてなほ銃後國民の一員として戦ひ抜かうとする不屈の戦場魂を燃えあがらせ二ヶ年の研鑽を積むのである。

撮影 鈴木 實

1朝のお出掛け
この補導所は原則として寄宿教



- 1朝のお出掛け
育であるが妻帯者で特殊事情にある者は自宅から通ふ。お父さん、行っていらつしやい。子供のために、不自由な手に自転車のハンドルを操る。
- 2適性検査
各人の希望は参酌するが、以前の職業で或程度まで基礎のあるものには適性検査が必要である。旋盤工に向かうなら？
- 3ハンマー作業
傷つた腕にもハンマーが振れるやうになつた。機械工となる基本作業のハンマーに力がぐつとももる。
- 4民謡體操
傷で硬直した體も民謡を口づさみながら踊るうちに何時かは柔らかなになる楽しい巧機運動。
- 5旋盤を征服
盲管銃創に右手の操力を失つたものも旺盛な意志と精巧な補助器で操力を取戻し、立派に旋盤を使ひこなす。
- 6フライス
足が不自由でも時々椅子に掛ければフライスを操る一日の勞働に耐へる。

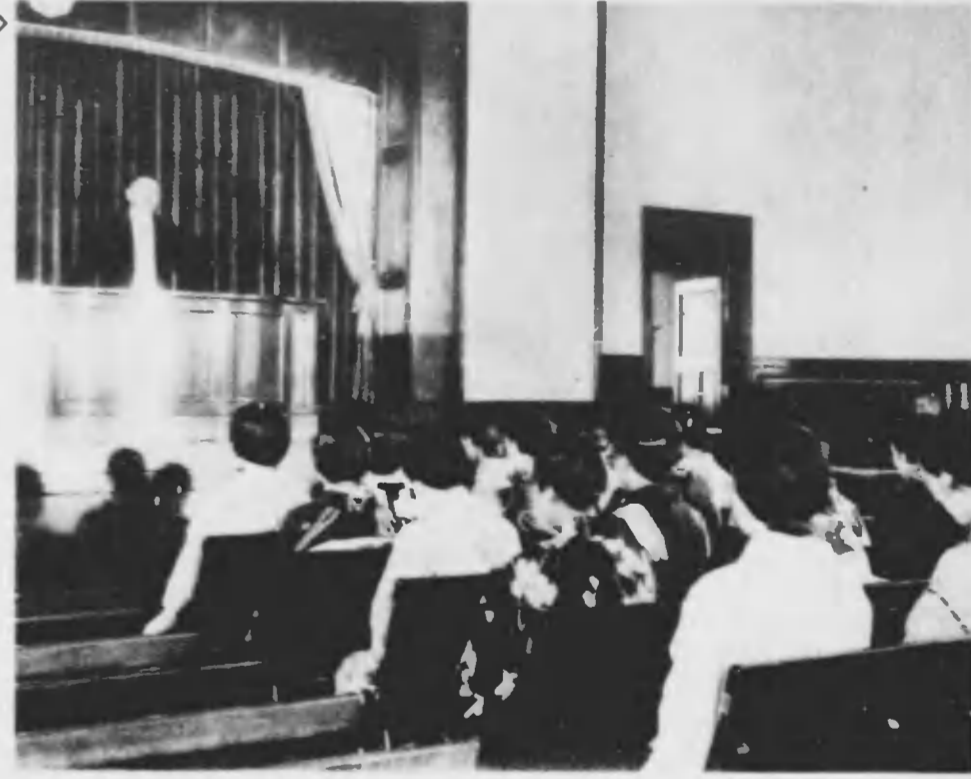


坊やお母さんは先生よ

未亡人のための特設教員養成所訪問記



東京女子師範学校内に開設された東京特設小学校教員養成所の入所式は九月十一日女子師範講堂で行われた。入所生徒凡て二十一名、所長が入所に當つての心得を演説をこめて浄々と説けば、亡き夫を想ひつゝ、聞き入る彼女たちに感涙の嗚咽さへ洩れる



大陸の戦野に興亞の礎として散華した戦歿將士の未亡人たちに教育家として榮光ある家門を守り、國に報する道を得させ、又経済的にも自活の道を開かせようと、このほど軍中保護院の手で東京に特設中等教員養成所、東京他五ヶ所に特設小学校教員養成所が開設された。學志を出で、幾年、いま又新しく學志の人となつた彼女たちは既に大半、幾人かの愛児の母である。その母の身でわづか一年の修業期間中に學校教員としての資格をおさめねばならない。愛児を家に残す心配、育て、ゆく苦勞もある。苦勞に向つては年齢的な不利も感ずるであらう。

しかし、既にけなげなスタートを切つた彼女たちは、かつての悲みを克服し、朗らかな女學生時代の昔に還つて人生再出發の希望に燃えつゝ、一心不乱の努力をつけてゐる。

撮影 吉田 榮



「この枠を右へねちれば空気がよく入つて火力が強くなります」
先生からきくブンゼン燈の説明に彼女たちは幾年前か前女學校で習つた化學のヘーデを次々と思ひ出す

私たちは再び生徒だ、女學生なのだ、獨りあれば兎角奮へる悲しい思ひ出を彼女達は敢然とふりはらつて眩しいばかりの校庭に出た。

バスケット、おやりになりません？
女子師範生の辛直な勝負に彼女たちもすなほに組に入つて力限りボールを投げあげてみた。

幾年振りに投げるボールであらう、幾年振りにかに彼女達は明瞭無心の女學生の音に還れたのだ



可愛い妹たちのやうな女子師範生と食卓を並べて一緒に食べた御禮當の機で、彼女達は師範生の弾くオルガンに合わせて唱歌を歌ふ。樂譜の上み方も忘れてゐた。オルガンの弾き方もこれからしつかり練習しよう

今夜も彼女は愛兒と並んで夫の眞摯を祈る。御安心下さいませ、私はきつと貴方の名を恥しめないやう立派に教育者となつてお國につくします。武子もこんなに元気です。

愛兒の合はせる紅葉のやうな掌をみて、母の瞳はふと熱いものにくもる



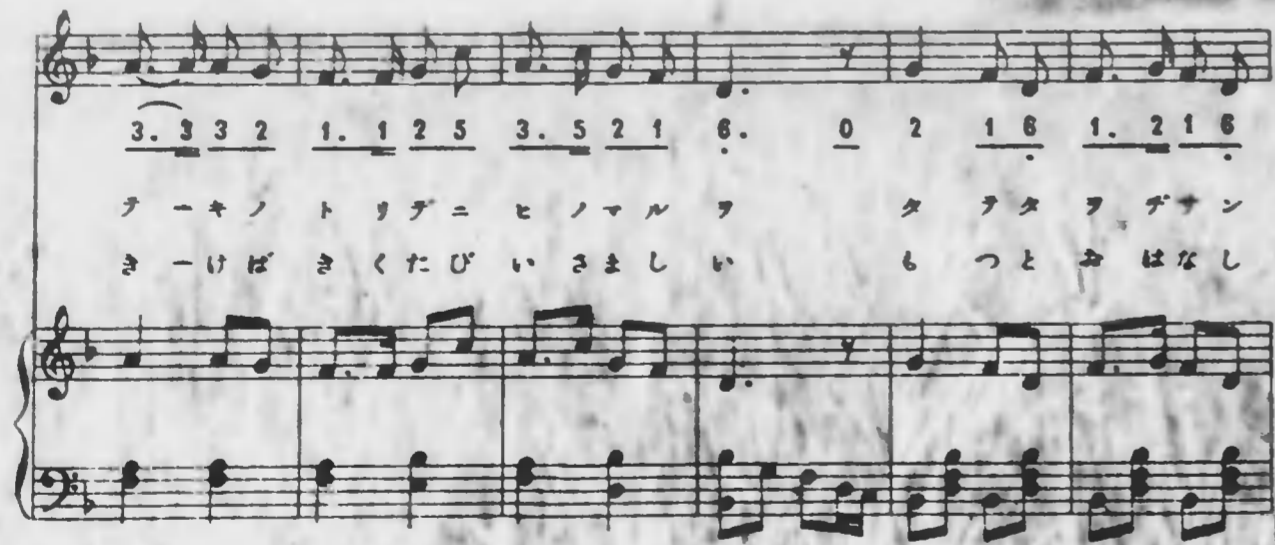
「は、ま、ま、可愛い人たちに負けな學生に還つた母親の眼は食ひ込むやうに

をちさんありがたう

(傷痍の勇士に捧ぐ)

—軍事保護院編定—

土岐壽重作詩
中山晋平作曲



一 お國のたりに
敵のとりで
立てたをちさん
をちさんをちさん
戦地はどこよ
聞けば聞かたび
もつとお話
をちさんをちさん

二 お胸のうへの
かざるをちさん
をちさんをちさん
をちさん
をちさん

三 お胸のうへの
かざるをちさん
をちさんをちさん
をちさん
をちさん

四 野にも山にも
をちさんをちさん
をちさん
をちさん

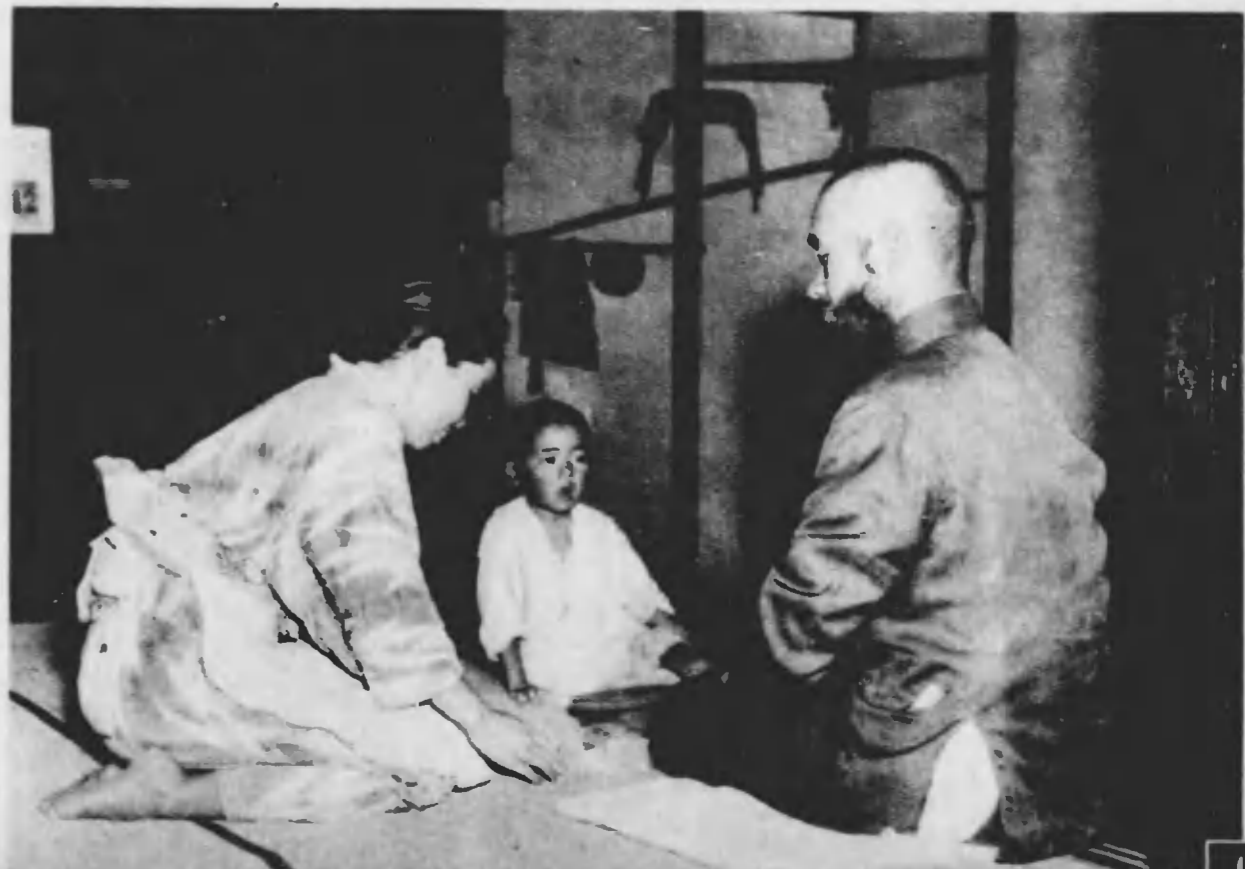
五 野にも山にも
をちさんをちさん
をちさん
をちさん

お手柄たてて
おの丸を
お褒はいかが
ありがたう
南か北か
おましい
して下さいな
ありがたう
記事をみれば
いくし神
名譽のしるし
ありがたう
傷兵
元氣なお仕
皆なりませう
ありがたう
おふねも空も
勝ちいくさ
おのなかに
ありたり



勇士よ銃後は大丈夫

農村の妻女より



撮影 内閣情報部



お願ひ申しあげます。お便りのなかに支那の梨をお食べになつて、こちらの長十郎梨を想ひ出なさつたとのこと、村でも梨はやつとこの三日でかたがつきました。私も今、仙太といつしよに町の組合までリヤカーを引つはつて歸つてきたところです。今年の夏はほとんど雨が降りませんでした。その割には出来がよく、それに似てはなかくよいので喜んでおます。それにつけてもあなたさまの御留守中、總會のみなさまや婦人會の方々が、自分の家よりもまづ應召家族や遺族の方が先だといつて、梨のとりいれの前にも何回もゴルフをわさ／＼もつて来て梨畑の手入れをして下され、箱づめの時なんか五人も處女會の人たちが来てくれて、ほんとうに大助かりをいたしました。おついでの時、あなたさまからもよくお慰めを言っていたいけましたらと思ひます。



たゞ今おハガキを受けとりました。消印の日附を見ますと、二週間以上もかゝつてこちらに届きました。早く出動のこと、自分のお働きを

この三日、すつかり秋めいてまゐりました。が、戦地の方はいかゞですか。當地の山々は夏の間の黒い色から段々と青みがかつてき稲もすつかり黄金色にふさ／＼とみのり、あと半月もしたらかり入れが始まります。お父さまも速急で、いま野良から歸つたばかりですが、早速あなたさまのお便りを牛小舎の軒先で讀んでおらつしやいます。その様子をこちらから見ますと、それでもあなた様の御留守中、いく分目が遠くおなりになりました。せうか。

仙太は相變らず元気ですが、何しろ胸白さかりで、ハラ／＼してしまふこともございませう。それから家の豚が月はじめ仔を八匹うみました。目もまださだかでない仔豚が、母豚の乳をすたつて鳴く聲で豚小舎は一日中賑やかなことです。

それから、昨日は、村の喜作さんが二年二月ぶりでお歸され、わさ／＼家に訪ねて見られました。奥津上陸以來、あの方も自分ながい間の御留守中、昨日故郷にかへられたのです。顔がもう何といふかすつかり大層焼けして、上等兵ですがすつかり部隊長ひげを生やしてしまつて、留守中のことをいゝ感謝され、あなたさまにも是非是非よろしくとのことでした。

右、亂筆ながら近況お報せまで。こちらはしつかりやつてをりますから、あなたさまもよく御慰めのほどお祈り申しあげます。



夫夫大は後銃よ士勇

りよんさ僧小の會都



したので最近のこちらの便りを申しあげます
 この間中、東京は暑熱といつても過ぎる
 猛烈なお天気ばかりつづきましたが、この四
 五日やうやく秋らしい空の澄んだ爽々しい陽
 気になつて参りました。お内儀さんは夏ちよ
 つとお腹をこわして弱つていらつしやいまし
 たが、この頃はほんとに元気で、包装紙の裁
 断やら、帳付やらよくこなされて働けるもんだ
 と私たちが願うばかりの商賣に精出して
 ららつしやいます。朝はみんな六時には起き



旦那さま、元
 気でいらつしや
 いますか、御無
 沙汰ばかりして
 わて相済みませ
 ん。
 今日はお、お
 客のお菓子屋さ
 んへ包装紙の配
 達も一段落しま

ますし、夜は十二時すぎまでお内儀さんの起
 きておられるのも珍らしくありません。しか
 し、お内儀さんのお手紙で御存知のことと思
 ひますが、旦那様御出征以来、お内儀さんは
 じめ私ら皆が一生懸命働いたお蔭と、皆さん
 の御同情で御顧客もへる所か次第にふえて、
 御出征の當時、百五十軒のお顧客が今では
 百六十軒を越さうとしてをりますから、そ

の點は、どうか御安心下さい。

それに先月あたりから、よく家の事情を知
 つてゐるお顧客さんは、女手と小僧だけでは
 集金も大へんだらうと、わざと御取帳をも
 つて賣掛金を届けて下さるところも少くあり
 ません。

今思ひ出すと坊ちゃんも旦那さま御出征の
 當時はやつと誕生をむかへたばかりでしたの
 に、今ではすっかり利かぬ氣のヤンチャに
 なつて、親宛をかぶつてそこら中樂書した
 り、近所の子供と陣とりごつこをやつていま
 す。もうこの頃は兵隊ちゃんになるんだと
 いつて大へんな元氣です。

御出征の當初は、お内儀さんも勤定元帳
 のしめくりが慣れないで、する分天手古舞
 されたのですが、この春、裏の靴物屋さんの
 御隣居が、お内儀さんの手をとるやうに帳
 簿記入を教へて下さつて以来、今ではわきて
 見てゐても全く板について、あざやかなもの
 ですが、こゝまでなるのには言ひ知れぬ御苦
 心があつたと思ひます。

たい今、この手紙を書いてをりますと、そ
 れではいつしよに慰問袋を送りませうとおつ
 しやつて、お内儀さんは旦那さま御好物のゆ
 であづきのかんづめや羊かんを買つていらつ
 しやいました。いつしよにお送りいたします。
 私たちは一生懸命銃後をがんばつてをりま
 すから、どうか御勇勵のほどひとへにお願ひ
 申しあげます。



遙かなる祈り



芥澤光治良

長男の新一が奮闘した時、父は、大男の向ふの、善會所へ通つてゐた習慣を、
の誠二が奮闘してくれたらと、嘆いてゐた。
そんな風に身勝手な父を、美代はいつ
も情けなく思ふ。誠二兄さんがよくさだ
めこんでゐるので、兄さんには兄さんの
真意があるが、お父さまは知らうともな
さらぬ。
新一が出征してから、父は多年踏切り
居座つてゐたのを、てれかくしにかさ
こそ音をたて、新聞の三面をあげたりす
る。朝から晩まで、長男の出征した
ことが、芯にこたえて残れたからでせう
と、見ぬふりをするが、頑張りませうね
と、ほんとうに父に話しかけて聞かした
いくらである。しかし、さう願ひした
ら、白い顔に唾をつけて、わしはまだ若
者に負けないといつて、却つて叱られ
るにきまつてゐる。
午後、それでも、古い善會所を持ち出
して、新聞の圓蓋を開いては、隅り石
をなべて楽しんでゐる時が多い。その
頃新聞には本因坊と木谷七段との對戦が
くりひろげられてゐた。父は白を持って
いつも本因坊になつたつもりである。
觀戦記は讀まない。本因坊になりすま
して、次の一手を半日も考へるほど熱心
であるが、次の日の名人の石を見て、
「さうか、さうか、やつぱり」と思はず
鳴ることがある。美代は驚きながらそ
の愛憎におどろかされて、心配してそつ
たためがない。しかし、父は誠二に面
つた。誠二が起きると、狭い庭へ降りて、
見失つた息子といふ
形であつた。
誠二は卒業しても就職しなかつた。
父はまた欺かれたやうに感じた。あれ
はやくさだと自らに云ひかかせて、我慢
した。勿論誠二の彫刻の上での苦勞など
は、分る苦もなく、やゝもすれば弟を庇
護する新一をも、物足りなく感じて、
「男一匹、自分のめしぐらを稼ぐ人間に
なれ」と、不平をもらした。
誠二は友人のアトリエにかよつて制作
をした。夜おそく歸る日がつづいた。
それを、父は夜遊びと誤解して、或夜、
彼の歸るのを待ち構へて、自ら支障を開
けて、
「親を馬鹿にするにもほどがあるぞ、も
ろ家へは入れん。勘當するぞ。出てらせ
ろ」と、取鳴つた。
誠二はアトリエを持つ友達の家へ厄介
に打合せしたところ、父は誠二の顔さ
へ見れば不愉快になるのだから、當分勤
當されたまま、家に歸らない方がよから
うと、いふ意見であつた。そして、その
通りに實行した。
友人は誠二の彫刻の方の才能を認めて
ゐたから、喜んで世話をした。兄も僅か
ながら経済的な援助をしたので、研究をつ
づけられた。従つて、誠二の動靜は、新

「あんなこと。」
「紙をはいで来い。」
さう取鳴つて、階段の方を指した。母
はすなはち、二階へあがつて紙をはいだ
「新一もぬいことですし、二階へどな
たかお世話しようと思ひました。」
母は恐る恐るさう云つたが、下宿人へ
「家庭のなかへ、何處の馬の骨か分らな
い人間を、平氣で入れておけるか」
「新一たちも、東京へ来たときは、人さ
んのお宅へご厄介になつたのですから」
「二階の座敷へは、新一が戻つて来る
じやないか。馬鹿な」
誠二は、誰かに貸したいと、母
はなほ主張したかつたが、新一の部屋
へ他人を入れたら、歸つて来ないかも知
れないと、ふと迷信らした。不吉な豫感
がして、黙つてしまつた。
「困つたら、みんな田舎へ歸ればいい、
田舎へ行けば、米はあるし、みんな親切
にしてくれるから、くよくよ思ふな」
暫くすると、父は眞の煙を眺めながら
氣まづく獨言のやうに、靜かに云つた。
年とつてから東京へ出て、まだ四年に
しかたない父には東京は淋しいところ
である。香氣に話せる友人がない。行きた
い場所がない。往來する親戚がない。隣
り近所はくつき合つてゐながら、敵同
志のやうに、言葉もかけない。父は東京
を待つ間どんな困苦にも耐へられさうに
なほし物などを持つて来てくれた。
「東京つていいわね、どんなに暮しを
下りても氣がねえところがないよ」
さう母が美代にも云つて、新一の動靜は
「おい、いいかげんにせんか」
たまりかねて、下から取鳴る。誠二は
また、朝寝で、それが父の神経にさける
朝つばらから、ラヂオ體操をガアガアか
けて暗に早起するやうに促すが、通じ
ないらしく、家の者と一緒朝食をこつ
と懐のすきからのぞいて見ると、父は善
盤の前にきちんと端坐して善盤をにら
んでゐる。その涼しい風貌は、地方の縣
廳の義務課に、三十年近くも勤官として
勤務し、恩給年限もすぎたから、子供の
教育費を東京へ送るよりも一家づつて東
京へ移つた方が経済的であるからとて、
やむなく退官した。役人の古手には見え
ない。やはり、その地方での善盤の三男
である古い血統が、年をとるとともに風
貌に立派ににじみ出て来たのかも知れな
い。
東京へ出てからも、僅かな恩給で生活
に窮して、分家する時に分けてもらつ
た故郷の田地などを少しづつ賣つて、子
供の學費に給した。田地を子寶に代へる
のだと考へてゐた。三十年間、役所で學
校出と學校を出ないものとの不公平な立
身出世振り、身をもつて體驗した父は
子供の學費に先祖から遺贈せられた財産
を、注ぐことはもとより、何を犠牲にし
ても惜しまなかつた。
子寶といふが、父は新一と誠二を名實
ともに賣にするために、不動産を賣りつ
くし漸く新一もサラリーマンとなつて、
安堵したやうな時に、應召したのである。
美代は父が善會所に行かずに、新聞蓋
を唯一の慰安にするのも、小遣が不如意
だからと知つて、お氣の毒に思ふ。
毎晩の晩酌も二本を一本にした。その
一本も、母は父の氣の付かないやうに注
意して量を次第にへらして行つた。父は
それを知つて、最後の一滴を歪みについで
しまふときまつて母の顔を不審さうな目
で見ると、酒をたしなむ者は酒には意地地
たなくなるので、ふだんならば無氣にな
つて母を取鳴るのだが、父は一心に白

一を通じて、母や妹には分つたが、父だけは、彼が東京の街を宿もなくさまよつてゐるものと、考へてゐた。

「あのやうな者も、これで親のありがたさが分るだらう。」

さう強がり云つたが、父は、毎日新聞の三面記事を注意した。誠二が悪事でもしないか、又は、のたれ死でもしないか、内心心配でならなかつた。

新一が悪事すると、誠二も就職して、家をすけなければと決心した。新一にも、家のことは心配しないで下さいと、約束して見送つた。しかし、誠二は悪事はすてたがなかつた。彫刻をすてずに就職するといふのは、困難なことであつたが、或る機にセツト係に職を得た。そのため、毎月、僅かではあるが、生活の補助として、父には内証で、母にきまつた額を渡すことができた。

「新一が就職したら、笑談としてお父さまに報告をゆるしてらうですね。」
母は内証で誠二に會つて、そんな風に微笑したが、父はそれほど頭迷な老人のやうに、家族の者から扱はれてゐた。

さて、誠二の召集状が届いて、住所が分らないと、おろおろしてゐる父を見て母は美代と顔を見合はせる思ひだつた。眞實を語るべきか、語つたら目出度い門出の前で、却て氣まつい思ひをするのではなからふか、自然を待たう。そんなつもりで、美代に、心當りを探がさせるといふことにはなからつた。

その町内では、息子を二人出征させるのは、杉村さんがはじめてだといふので、新一の場合よりも、すつと盛大に見送つてくれた。

「大丈夫です。あの子も家のことを考へて、不名誉なことはしませんでせう」とやはり目をしばたいてゐた。

「わしも、あの子たちが、立派にご公務するためには、わしが老いこんでゐないで、減私奉公になるやうなことをしないと、いかんと思ふのだが。」

やくざな息子が、戦地で辱かしいことをしないようにするには、自分がまごころをつくさなければと、父は信じこんだやうである。

父も新一の出征する時には、「これが田舎なら、四斗樽のおかがみをあけて祝ふのだが」と、見守るすの人のやうな東京の生活をさびしんだが、誠二の場合には、

「勿論ないことだ、こんなにお世話にさう在郷軍人が時々慰問に来てくれるのだから」と、喜んで町會や在郷軍人や國防町内で行き合ふ人も、父に丁寧挨拶をしてゐた。

實際、新一の出征から一年ばかりの間が過ぎた。町の人々たちの間に親密の度もすつと、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」



も、遠慮しようといふ風潮が仄かに現はれて来た。そのことが田舎から出て来た孤獨な父には、ぼんやりながら、暖かに感じられて、ありがたかつたのである。

「不自由なことはありませんか。」
さう在郷軍人が時々慰問に来てくれるのだから」と、喜んで町會や在郷軍人や國防町内で行き合ふ人も、父に丁寧挨拶をしてゐた。

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

「戦地にわらつしやるご子息方からお便が来ると、話しかける人もある。母はまた國防婦人の服装をして、よく町内の婦人方と出掛ける。二人の息子を戦場へ送つた母といふので、みんな尊敬するのであらうが、母も田舎者である身で、忘れて、自信にみちて、國防婦人會の仕事にたづさはれるらしかつた。町内で、あらはした。」

しかし、父と母とは違つた不安があるらしい。

父は新一の出征した場合には、明治神宮にお詣りもしたかつたが、誠二が出征した場合には、週に二回は必ずお詣りに出掛ける。神棚にも朝夕、掌を合はせるやうになつた。

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

「あんなやうな者が、お國のために立派に奉公ができるか、心配だ。あんな風に盛大にして送つていただいたからな」
或夕、父は夕食の席で、さう吐息したたことを、そんな風にしみみりと云つて

読者の
カメラ



白衣勇士の
速記講習
秋田県
秋田陸軍病院の
白衣勇士三十五名
は、このほど秋田
家政女学校主催の
速記講習会に出
席した。
女学生に混った
受講男子は、銃剣
を掛けたまま、手
に、或は左手に
ペンを握り明日の
職業訓練への出動
準備に精進した



慰問袋を送りませう
福岡市 青木 進
『兵隊さん有難う』と銃後国民の感謝は慰問袋となり戦地へ送られる。このほど福岡県主催で募集した慰問袋基金は續々と全隊の隅々から集まった。この慰問袋の調製を依頼された同市松尾デパートは学生勤労奉仕隊の整理を得て、「一日も早く戦地へ」と荷造りし、大急ぎである。
映のラチオ映像
京都市 稲垣照子
秋の訪れとともに涼しいこの頃の早朝、巷には町内のラチオ映像が元氣よく泡濺する。京都市室町頭町々内はごらんのようなラチオを戦線に併く町内出身者へ送り出征家族の健在を傳へた



復習室
本號からあなたは何を學んだてせうか？
1 白濱温泉療養所はどういふ人がちが治療をうける所だせうか？
2 國立の傷痍軍人職業補導所は全國ていくつありませうか？(6頁)
3 こんど行はれる銃後後援強化週間はいつからだせうか？(1頁)
4 温泉療養所や國立職業補導所は何といふ役所で管轄してゐませうか？(2頁)
5 白濱温泉療養所はどんな目的で設立されたか？(2頁)
6 特設中等教員養成所及び、特設小學校教員養成所はどんな人たちのために開設されたのでせうか？(8頁)
7 特設小學校教員養成所はこんど全國で幾ヶ所設けられましたか？(8頁)
8 國立職業補導所へ入所する資格は？(6頁)
9 昨年十月三日には有難い物語を聞きましたか？何に關する物語でしたか？(1頁)
10 職業補導所の傷痍軍人が皆で民衆の協力を得るには何のためだせうか？(1頁)
一問十點としてあなたは何點でしたか？

「報週」と「報週眞寫」へ地戦を

戦地の勇士たちは内地の事情を傳へる眞實な文字を渴望してゐます。
『寫眞週報』はかうした勇士に銃後からの贈物として好適のものと思ひます。どうか一冊でも多く戦場に在るあなたの兄弟や友へ送つてあげて下さい。
送り方は二つに折つて帯封をし、『軍事郵便』と明記して一錢切手を貼付し、直接出征部隊へお送り下さい。『週報』と『寫眞週報』を直接あなたの手から戦地の勇士に送り、銃後と戦地を力強く結びませう。

所 込 申	價 定	寫眞週報(禁轉載)
郵 局	一 部 十 錢	昭和十四年九月二十日印刷發行
半ケ年(前金)二圓四十錢		編輯者 内閣情報部
一ケ年(前金)四圓八十錢		發行所 東京市神田區水田町
(外購郵便に依る場合は前金を添へ御申込下さい)		印刷所 内閣印刷局
内閣印刷局發行課		東京市神田區大手町
電話九ノ内(三)五一一九		
郵管東京一九〇〇〇		
全國各地官報販賣所		
東都書籍株式會社		
各書店・露賣店		
各新聞販賣店		
寫眞材料店		

寫眞週報
★表紙
若打つ波も靜かに雨紀の海は紺碧に輝く。千疊敷に釣糸を垂れる大公堂に混つて遊覧の人たちも傘を持つ。釣の妙味はまた手の不自由な硬直をほぐす良法でもある。おちさん、お魚釣れたら誰に上げるの、お魚さんにはお魚釣れないよ。
撮影 鈴木 實

興亞建設

興せよアジア
築けよ健康
豊富なる資源は
わかもとにあり
若き血潮、や増しに
細胞は生々と舞へり
病敵を斷平制壓
響け凱歌
建設へ高らかに

價藥 廿五日量
一圓六十錢



胃腸 榮養 わかもと

東京製薬所
わかもと本舖



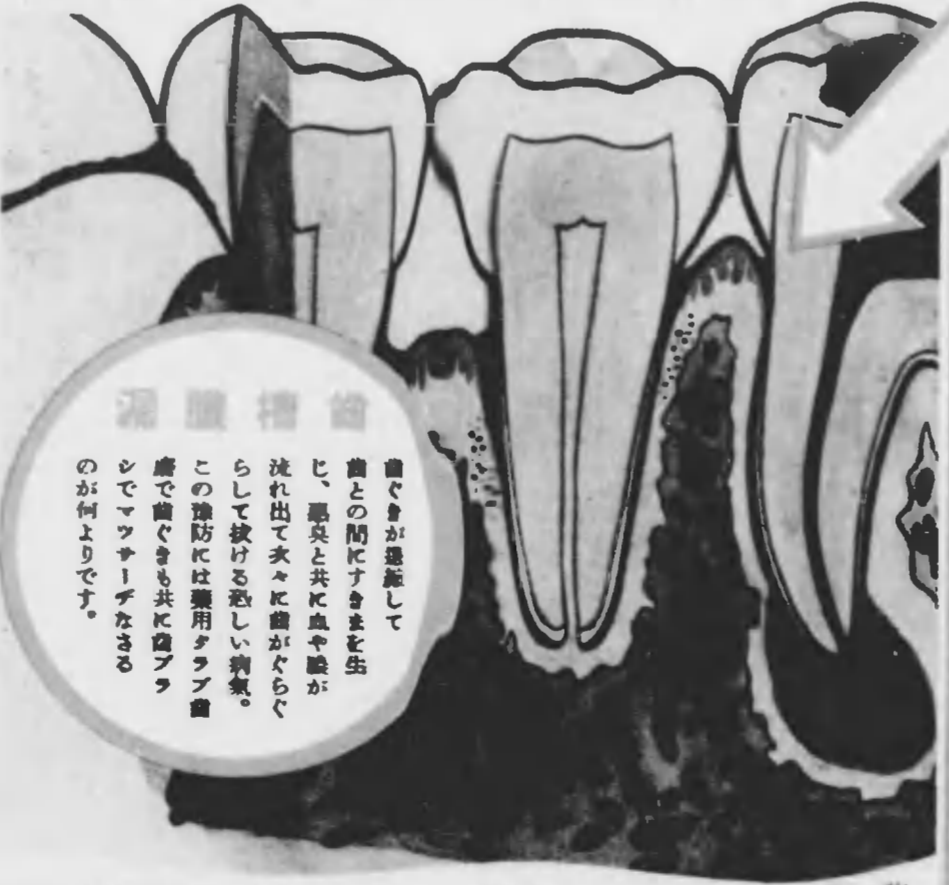


歯磨きを不完全にし
 栄養を低下させ體力
 を減失する國民病を絶滅
 せよ！ この恐るべきムシ
 歯の直接的予防には清掃・
 薬効力の強い薬用クランプ歯
 磨で口中の有害菌を一掃
 するより他に方法があ
 りません。

ムシ歯 歯槽膿漏の防止は 口腔の完全清掃に！



最 最近の進歩せる殺菌
 剤は單に殺菌のみを
 目的とするものでなく進ん
 で病源をつきその治療的効
 果を發揮します。薬用クラ
 プ歯磨に應用せる殺菌劑ク
 ロールカルヴアクトール、
 ヨードチモールは、イダールも
 積極的薬効性能を有するも
 のでその殺菌力に於ても到
 底他の追従を許しません。
 ムシ歯、口臭、歯槽膿漏その
 他の口中疾患を防止するの
 もこの威力あればこそです



歯ぐきと歯
 との間には
 歯垢が蓄積して
 歯と歯と共に歯垢が
 流れ出て夫々に歯が
 らして抜ける恐しい病氣。
 この予防には薬用クランプ歯
 磨で歯ぐきと共に歯垢を
 シてマツチアデなせる
 のが何よりです。

磨歯ブラク

内閣印刷局印刷發行

(特許、商標・A4種模範図は最大の商標)